

自我体験と障害（者）に対する信念・態度

The Ego-experience and the Beliefs and Attitudes toward the Disabilities

高井弘弥*

TAKAI, Hiromi*

要約

「私はなぜ私なのか」という問いにとらわれ、そのことで自分の存在基盤に疑問を持つようになる「自我体験」の研究が近年多くなされている。そして、すべての人が持つわけではないこのような自我体験を持つことが、その後の世界についての認識にどのような変化をもたらすのかについても研究が進められている。本研究では、自我体験が自己を相対的にとらえるようになることと関連して、自分とは異なる存在としてとらえがちな障害者への信念・態度にどのような影響をもたらすのかを、顕在的・潜在的信念・態度を通して検討した。その結果、自我体験により自分の存在を相対化してとらえることが、自分が障害を持つことになる可能性を想定することと関連することが明らかになった。

キーワード：自我体験，障害に対する信念・態度，潜在連合テスト

自我体験とその意味

「私はなぜ私なのか」という問いとそれに対する答えを求め「自我体験」(ich erlebnis, ego-experience)は心理学のかなり早期から注目されてきた。にもかかわらず、このような体験は極めて主観的なものであり、また初発の時期が小学校高学年から青年前期までと幅広く報告されており、回想的な内観報告によるものが多かったため、正面切って捉える研究は少なかった。しかし、高石(1988)⁽¹⁾が臨床心理学の立場からこの自我体験を取り上げ、さらに渡辺・小松(1999)⁽²⁾が再び取り上げることで、自己意識研究の重要なテーマになってきた。特に、天谷の一連の実証的な研究により、自我体験とパーソナリティ特性・孤独感との関連⁽³⁾(天谷, 2009)、自我体験後の自己成長感と脱中心化⁽⁴⁾(天谷, 2017)などが明らかにされてきた。これらの研究の流れについては千秋⁽⁵⁾(2017)がコンパクトにまとめている。

このような自我体験そのものはすべての人々が経験するものとは言えないが、自我体験がもたらす「違った世界でも存在したかもしれない自分が、今のこの世界に存在している」⁽⁶⁾(高井, 2004)や「世界観や人間観のとらえなおし」⁽⁷⁾(天谷, 2011)という認識の変化は多くの人が体験しているものではないだろうか。

自我体験の研究には、この体験そのものを重視し、いわば自我体験の実存的側面に注目するものと、自我体験に伴う認識の変化とその影響に注目するものの2つの流れがある。本研究では、後者の立場で自我体験による認識の変化が、社会や他者を捉える認識にどう影響してい

るかを検討する。

天谷(2017)が批判的思考態度・観点取得との関連について行った研究⁽⁸⁾では、自我体験を経ることが共感性の認知的側面である観点取得の高さにつながることを示された。ここで取り上げた観点取得は「友達から見たら物事がどう見えるかを想像して友達を理解しようとする」といった項目である。このような観点取得が、自我体験を経たことで高くなったことがこの研究では示唆されている。

本研究では、このような他者一般に対する観点取得ではなく、普段の自分の生活からは距離が遠い障害者への態度が自我体験とどのように関連するのかを検討する。

障害（者）に対する信念・態度の測定

観点取得が偏見の低下にどのように寄与しているかについては Todd and Burgmer(2013)⁽⁹⁾が検討している。彼らはいくつかの方法によって観点取得を強められた被験者はそうでない被験者よりも、自分たちとは異なる集団への潜在的な偏見が低くなることを示した。

ここで潜在的な偏見の指標として用いられたのは、他の同種の研究でも広く使われている潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT)である。Greenwald and Banaji(1995)⁽¹⁰⁾が提唱した IAT は、現代では偏見を持っていることを明示的・顕在的に表出することが社会的望ましさから避けられてしまう人種・ジェンダー・マイノリティに対する潜在的信念・態度を測定する方法として定着している。

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

IATの基本的な方法は、ネガティブな刺激のカテゴリに偏見の対象を分類する反応時間とポジティブなカテゴリへの分類の反応時間との差を見ることで、潜在的な偏見を測定するものである。反応時間を測定するために、実験室等で個別に行うか、ウェブ⁽¹¹⁾上でやはり個別に行うなどの方法が一般的である。

近年、このようなPC等を用いて個別に反応時間を測定するIATに加えて、集団での実施が可能な、一定時間内での反応数によって指標を算出する紙筆版潜在連合テスト(以下紙筆版IAT)も用いられるようになってきている(岡部・木嶋・佐藤, 2004⁽¹²⁾; 横嶋・山口・賀屋・内田・山崎, 2017⁽¹³⁾)。本研究では、この紙筆版IATを用いて、障害(者)に対する潜在的態度を測定する。

本研究の仮説

自我体験を経験することで、自分を相対的にとらえ自分が他でもあり得た可能性に気づく。そして、自分が障害を持ったかもしれない、これから持つかもしれないことを感じることで、障害者の観点を取得することが容易になるのではないかと。

研究1: 自我体験と障害に対する顕在的信念・態度

目的: 自我体験と障害に対する顕在的信念・態度の関連について検討する。

方法: 自我体験については、天谷(2005)⁽¹⁴⁾の尺度15項目を用いた(Table 1)。

Table 1. 自我体験尺度の項目

1	自分はどこから来たのだろうか?
2	自分はどこへ行くのだろうか?
3	自分は何だろうか?
4	自分は誰だろうか?
5	いったい何をもって「自分」としているのだろうか?
6	自分の正体って何だろうか?
7	自分の存在そのものが不思議だ。
8	自分は本当に自分か?
9	自分はなぜ自分なのだろうか?
10	誰でもなく、どうして自分なのだろうか?
11	自分が自分であることが不思議だ。
12	なぜ私はこの体を選んだのか?
13	私が私としてでなく、他の誰かとして生まれたということもあっていいのに、どうして私となっているのだろうか?
14	いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろうか?
15	自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、たまたま日本の、この時代に生まれたのか?

回答は各項目について「思ったことがある」「近いことを思ったことがある」「なんとなく思ったような気がする」「思ったことがない」の4件法を用いた。

自我体験そのものについて直接調べる方法をとらずに、このような尺度を用いるのは、上述したように本研究では体験そのものを取り上げるのではなく、体験がもたらす認識の変化の影響を考えることが目的であり、「体験している・していない」の二分法で検討するよりも、連続的な尺度としてとらえる方が適切だと考えたためである。障害に対する顕在的信念・態度を測定する方法としては、20項目からなる質問紙を用いた(質問項目はTable 3を参照)。回答は各項目について「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」の5件法を用いた。

被調査者は女子大学生147名。心理学関連の一般教養科目受講者を対象に、授業終了後に質問紙を配布し、一斉に行った。成績等には関係ないこと、個人を特定せずにプライバシーに配慮してデータを取り扱うこと、結果については授業内で報告することなどをアナウンスした。

結果: 天谷(2011)⁽¹⁵⁾は、自由記述によって分類した「未体験群」「あいまい群」「体験群」の3グループで自我体験尺度得点に有意な差があることから、量的な自我体験尺度が質的な自我体験の有無を反映していることを示した。そこで、本研究ではこの自我体験尺度得点をもとに自我体験の程度によってグルーピングすることを試みた。自我体験尺度15項目の合計得点について、最近傍法を用いた階層クラスタ分析を行って、デンドログラムを検討したところ、3つのクラスターにまとめることができた。その得点分布を見ると、20点前後、40点前後、55点前後の3グループに分かれていて、これは天谷(2011)での分類とほぼ同じ分類になる。そこで、本研究では、自我体験の得点が最も低いグループを「低体験群」、最も高いグループを「高体験群」、中間のグループを「中体験群」とした(Table 2, Figure 1)。

Table 2. 自我体験尺度得点によるクラスター分類の結果

低体験群 (n=66)	平均値	20.68
	標準偏差	4.34
	最小値	15
	最大値	29
中体験群 (n=57)	平均値	39.81
	標準偏差	5.40
	最小値	30
	最大値	49
高体験群 (n=19)	平均値	54.68
	標準偏差	2.29
	最小値	50
	最大値	58

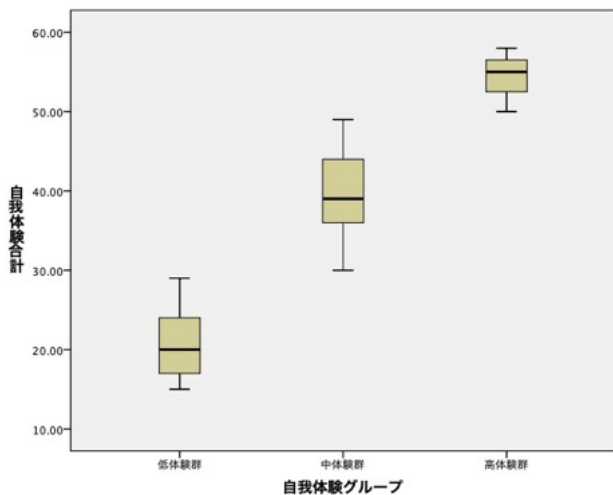


Figure 1. 自我体験得点の各グループごとの得点分布

次に、障害（者）に対する顕在的信念・態度尺度について、因子分析を行った。その結果、2つの因子が抽出され、それぞれ「障害負担感」「障害相対感」とした(Table 3)。

Table 3. 障害（者）に対する顕在的信念・態度得点の因子分析

	因子	
	障害負担感	障害相対感
一般社会で生きていくためには障害は軽くなくてはならない。	0.708	-0.039
重い障害のある人は社会参加ができない。	0.618	-0.060
障害があるということは本人や親にも少し責任がある。	0.611	-0.289
重い障害のある人は一般社会とは別なところで保護すべきだ。	0.600	-0.132
障害のある人が普通の生活をおくれないのは仕方がない。	0.588	-0.226
障害のある人と一緒に働くのは大変だ。	0.554	-0.090
日本にいる外国人の障害者は社会の支援が少なくても仕方がない。	0.519	-0.315
障害のある人はかわいそうだ。	0.514	-0.022
社会に支えてもらっている障害のある人は社会に感謝すべきだ。	0.454	0.027
障害のある人の生活は親や家族が責任を持つべきである。	0.443	-0.119
自分にも障害のある子どもが生まれるかもしれない。	-0.046	0.874
自分も障害者になる可能性があると思う。	-0.101	0.617
自分が障害を持っていないことはたまたまであると思う。	-0.165	0.547
社会には一定の割合で障害のある人がいるものだ。	-0.160	0.484

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

そして、自我体験のグループごとに、この「障害負担感」「障害相対感」の因子得点の平均値について、一要因分散分析を行った(Table 4.)。その結果、「障害負担感」については有意な関連は見られなかった($F(2,135)=0.318, n.s.$)。「障害相対感」についてはグループ間に有意な関連が見られた($F(2,135)=5.733, p<.00$)。

Table 4. 自我体験グループごとの障害に対する顕在的信念・態度得点の比較

	n	Mean	SD	
障害負担感	低体験群	64	0.023	0.907
	中体験群	56	-0.067	0.858
	高体験群	18	0.12	1.167
障害相対感	低体験群	64	-0.248	0.932
	中体験群	56	0.298	0.798
	高体験群	18	0.103	0.995

そこで、グループ間で下位検定を行ったところ、「低体験群」<「中体験群」, 「高体験群」という差が見出された。「中体験群」と「高体験群」との間には有意な差は見られなかった。

考察：自我体験には、「私が私としてではなく、他のだれかとして生まれたということもありえたのに、どうして私となっているのだろうか?」、「いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろうか?」、「自分はなぜ他の国や他の時代ではなく、日本のこの時代に生まれたのか?」といった項目が含まれている。このような「自分が他でもあり得た可能性」について考えることが、「自分にも障害のある子どもが生まれるかもしれない」や「自分も障害者になる可能性があると思う」といった、自分が障害を持つ可能性について強く捉えることにつながったのであろう。しかし、「中体験群」と「高体験群」の間には有意な差が見られず、明確な自我体験が、自分が障害を持つ可能性を導くということではないようだ。

また、「障害負担感」については自我体験との関連は見られなかった。これは、各質問項目の全体での平均得点と標準偏差を見てみると、例えば「一般社会で生きていくためには障害は軽くなくてはならない」($M=4.12, SD=.99$)や「重い障害のある人は社会参加ができない」($M=4.50, SD=.68$)のように、「まったくそう思わない」という回答への「社会的望ましさ」による天井効果が見られたためだと考えられる。

研究 2：自我体験と障害（者）に対する潜在的信念・態度

目的：自我体験と障害（者）に対する顕在的信念・態度の関連について検討する。

調査用紙：自我体験については、研究 1 と同じく天谷 (2005)⁽¹⁴⁾の 15 項目の尺度を用いた。

障害（者）に対する潜在的信念・態度については、潮村(2015)⁽¹⁶⁾による紙筆版 IAT の実施手続きに基づいて行った。今回の IAT では、障害（者）についての「よい-悪い」といった偏見そのものを測定するのではなく、自分と障害（者）との無意識レベルでの心理的距離を測定することが目的である。したがって、潮村(2005)の例で「花-虫」と「良い-悪い」の潜在的連合を測定しているのに対して、本研究では「自分-他人」と「障害（者）」との潜在的連合を測定する。標準的な IAT では、「障害（者）-健常（者）」を概念として呈示することになるが、「健常（者）」の属性に対する刺激語には、例えば「五体満足」などのような価値観が深く入り込んでいるものであったり、「障害がない」などのように障害の否定という意味が入ってしまうものが多い。そのため、本研究では「障害（者）」という概念・属性だけを使ったシングルターゲット IAT で行った。このシングルターゲット IAT の妥当性については Bluemke and Frieze (2008)⁽¹⁷⁾ が検討しており、Wilson and Scior (2015)⁽¹⁸⁾ は知的障害（者）を対象とした潜在的態度の測定に用いている。本調査での被験者は全員が日本人の女子大学生であるため、「自分」の属性に入る刺激語としては「女子学生、若い、日本人」を、「他人」の属性に入る刺激語は「男子学生、老いた、外国人」を用いた。「障害」に属する刺激語は「障がい者、車椅子、手話」を用いた。

自我体験の質問紙と紙筆版 IAT をまとめて配布冊子を作成した。

手続き：一般教養科目の心理学関連授業の前に集団で行った。被験者は大学 1, 2 年生 189 名で、研究 1 と同様の説明を行った。

紙筆版 IAT は以下の手続きで行った。

1) 実験者は、潜在連合テストの基本的課題である「カテゴリー化」課題の概要説明を実際の測定対象概念とは異なる概念を用いた例（ここでは「ヘビ」概念と色属性（赤・白）を取りあげている）で行う。ここでは、分類すべきカテゴリーの左右位置が測定ブロックによって変わる事、また測定ブロックの順序は順不同である事、練習試行の制限時間（10 秒）、本試行の制限時間（20 秒）できるだけ正確にかつ速く回答することが重要であることを、配布された冊子上での説明文を見ながら説明する。

2) 実験参加者が課題を理解した後、4 回の測定ブロック（「練習試行+本試行」から構成される）を実施する。この 4 回の測定ブロックは、自分・他人というカテゴリーと、障害という属性の組み合わせパターンによって構成されている。

実験冊子の一部を以下に示す。

他人	障害 自分	
	障がい者	
	老いた	
	若い	
	女子学生	
	車椅子	
	日本人	

Figure 2. 紙筆版 IAT 実験冊子の一部

結果：自我体験については、研究 1 と同様にクラスター分析を行って、3 つのグループに分類した。

Table 5. 自我体験得点によるクラスター分類

低体験群 (n=71)	平均値	22.72
	標準偏差	4.35
	最小値	15
	最大値	29
中体験群 (n=65)	平均値	36.03
	標準偏差	4.06
	最小値	30
	最大値	43
高体験群 (n=53)	平均値	49.67
	標準偏差	4.61
	最小値	44
	最大値	60

障害（者）に対する潜在的信念・態度については、潮村（2015）に従って、「障害-他人」の組み合わせ数から「障害-自分」の組み合わせ数を引いたものを「障害（者）との距離感スコア」とした。つまり、このスコアが大きいほど自分と障害（者）との距離が遠いという潜在的な判断をしているということである。

そして、自我体験のグループごとの障害（者）との距離感スコアの平均値について、一元配置分散分析を行った。

Table 6. 自我体験グループごとの障害（者）との距離感スコアの比較

	n	Mean	SD
低体験群	71	11.82	10.97
中体験群	65	9.83	8.96
高体験群	53	7.3	9.84

その結果、自我体験グループによる障害（者）との距離感スコアの平均値には有意な関連が見られ($F(2,186)=3.094$, $p<.05$)、グループ間で下位検定を行ったところ、「低体験

群」<「中体験群」,「高体験群」という差が見出された。「中体験群」と「高体験群」との間には有意な差は見られなかった。

自我体験尺度の得点によってグループに分けるのではなく、得点そのものを用いて、この得点と障害（者）との距離感スコアの関連を検討した。その結果、自我体験尺度と障害（者）との距離感スコアの間には有意な負の相関が見いだされた($r=-.19, p<.05$)。

考察：研究1の考察でも触れたように、自我体験は「今のこの自分ではなく、他でもあり得た可能性」について気づいた体験である。研究1ではその体験を経ることが自分も障害を持つ可能性をより強く考える契機になっていることが示された。そして、同じようにその体験が自分と障害（者）との距離は近いという潜在的な判断をもたらしているということがこの研究2で明らかになった。

総合考察

本研究の目的は、自我体験を通して得られた自己を相対的にとらえるということが、他者の観点を取得することを容易にし、自分とは異なる障害者の立場にたつことができるようになるのではないかと、という仮説を確かめることであった。

研究1, 研究2共に、自我体験の程度をあらわすと考えられる自我体験尺度の得点と、自分も障害を持つ可能性があると顕在的に考える障害相対感との関連(研究1)、自分と障害（者）との潜在的な距離感の近さとの関連(研究2)が示された。

栗田(2015)⁽¹⁹⁾は、やはり潜在的な態度を測定する方法の1つとしてのFUMIEテスト⁽²⁰⁾を用いて、障害者への偏見を低減するための様々な方法を紹介している。障害者との接触や多様性を受容するプログラムなどがこれまで提言されて、実施もされてきている。どの取り組みにもそれぞれの限界と有効性があるが、今後もこれらを粘り強く続けていく必要はいうまでもない。本研究で提案したいことは、このようなプログラムやトレーニングを実施するにあたって、自己をどれだけ相対的にとらえられているかどうかといった自我体験からの観点を取り入れて、その相互作用を考慮して進めていくことである。それは、自我体験を経験する前と後という発達的な視点であり、また自我体験度の高低といった個人差からの視点でもあるだろう。自分が他の存在でもあり得たということを感じることができやすい年齢や特性を持っている場合にはそれを障害と結びつけることで障害者の観点を取得させるようなアプローチが有効であろう。一方、自分が他の存在でありうるということが感じ取りにくい年齢や特性の個人に対しては、障害者の観点を取得させるよりも障害（者）に対するマナーや規範を具体的に示していく方が有効かもしれない。

本研究では、自我体験を経験したかどうかで二分法的に分けて検討はしていない。自我体験という経験を極値として、そこに至る連続的な特性としての自我体験度の影響を検討した。もちろん、自我体験を経験したということは本人にとって非常に大きなインパクトのあるできごとであることは確かである。しかし、他者や社会に対する認識の変化という観点からは、自我体験をしたかどうかということよりも、自我体験を含めた連続的なある発達的な認識の変化を考える方が有効なのではないだろうか。実際今回の2つの研究で、中体験群と高体験群の間には有意な差が見られなかったことから、体験するかしないかは少なくとも障害（者）に対する信念・態度についての違いは見られなかった。自我体験そのものを研究することは重要であることは間違いないが、自我体験を含めた世界の認識の変化を考える上では、体験の有無にとらわれずに検討することも重要であろう。そして、この変化が、ジェンダーやマイノリティなどの様々な社会に存在する偏見とどのように関連するかを検討することも有意義なことであろう。

本研究では障害（者）に対する信念・態度を潜在的・顕在的の両面から検討した。しかし、そのような信念・態度が現実には障害のある人々への支援や共存といった行動とどう関係するかについては検討していない。潜在的な偏見を持っていても障害のある人々へ献身的に支援する人もいるかもしれないし、その逆に潜在的な偏見はないが障害のある人々への支援には関心のない人もいるかもしれない。障害（者）に対する信念・態度を考慮に入れて、支援の質や支援を上げていくことを検討することも今後の重要な課題であろう。

引用文献

- (1) 高石恭子 1988 青年期の自我発達と自我体験について 京都大学教育学部紀要, 34, pp.210-220.
- (2) 渡辺恒夫・小松栄一 1999 自我体験：自己意識発達研究の新たな地平 発達心理学研究, 10, pp.11-22.
- (3) 天谷祐子 2009 自我体験とパーソナリティ特性・孤独感との関連—「私はなぜ私なのか」と問う取り組み方による違い パーソナリティ研究, 18(1), pp.46-56.
- (4) 天谷祐子 2017 自我体験経験後の自己成長感が自己意識・人生への態度・脱中心化に及ぼす影響—大学生を対象とした質問紙調査より— 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 27, pp.69-79.
- (5) 千秋佳世 2017 自我体験研究の外観と展望 京都文教大学臨床心理学部研究報告, 10, pp.51-59.
- (6) 高井弘弥 2004 発達心理学から見た自我体験

- 渡辺恒夫・高石恭子(編) 〈私〉という謎-自我体験の心理学- 新曜社 pp.195-213.
- (7) 天谷祐子 2011 『私はなぜ私なのか 自我体験の発達心理学』 ナカニシヤ出版.
- (8) 天谷祐子 2017 自我体験後の自己成長感に対する批判的思考態度・観点取得の寄与-大学生を対象とした質問紙調査により- 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 28, pp.1-15.
- (9) Todd, A. R. and Burgmer, P., 2013, Perspective Taking and Automatic Intergroup Evaluation Change: Testing an Associative Self-Anchoring Account, *Journal of Personality and Social Psychology*, 104, pp.786-802.
- (10) Greenwald, A. G. and Banaji, M. R., 1995, Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes, *Psychological Review*, 102, pp.4-27.
- (11) "Project Implicit", <https://implicit.harvard.edu/implicit/> (2019年10月15日閲覧).
- (12) 岡部 康成・木島 恒一・佐藤 徳 2004 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討-大学生の超能力信奉傾向を題材として 人間科学研究, 26, pp.145-151.
- (13) 横嶋 敬行・山口 悟史・賀屋 育子・内田 香奈子・山崎 勝之 2017 児童用の紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テスト: 実施の手順と採点方法の詳細の紹介, そして課題順序カウンターバランスの削除可能性の検討 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32, pp.101-110.
- (14) 天谷祐子 2005 自己意識と自我体験-「私」への「なぜ」という問い-の関連 パーソナリティ研究, 13, pp.197-207.
- (15) 天谷祐子 2011 自我体験尺度の項目得点と自由記述内容による自我体験判定の対応の検討 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』, 16, pp.177-185.
- (16) 潮村公弘 2015 潜在連合テスト(IAT)の実施手続きとガイドライン: 紙筆版 IAT を用いた実習プログラム・マニュアル 対人社会心理学研究, 15, pp.31-38.
- (17) Bluemke, M. and Friese, M., 2008, Reliability and validity of the Single-Target IAT (ST-IAT): assessing automatic affect towards multiple attitude objects, *European Journal of Social Psychology*, 38, pp.977-997.
- (18) Wilson, M. C. and Scior, K., 2015, Implicit Attitudes towards People with Intellectual Disabilities: Their Relationship with Explicit Attitudes, Social Distance, Emotions and Contact, *PLoS ONE* 10(9), pp.1-19.
- (19) 栗田季佳 2015 見えない偏見の科学-心に潜む障害者への偏見を可視化する 京都大学学術出版会.
- (20) Mori, K., Uchida, A., and Imada, R., 2008, A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts, *Behavior Research Methods*. 40, pp.546-555.